

は先のM. H' Doublerのダンス学習法を再見する論文もみられる。

アメリカでは、他に研究誌“Research Quarterly”にもダンス関係の研究報告がみられる。また、日本の体育関係月刊6誌とともに“Dance Magazine”や“Journal of Physical Education and Recreation”なども研究と教育現場の交流としてみなければならないだろう。更に、民族舞踊と音楽関係では“Ethnomusicology”をみなければならない。R. Labanの記譜法は、この分野にも活用され、また、記号論的なアプローチ、各国の舞踊分析が報告されている。イギリスのR. Labanの方法が運動教育としてアメリカにも導入されていることはすでに知るところであり、東西、その研究・教育の交流は興味深いものがある。

今夏The Committee on Research in Dance(前述CO-RD)とAmerican Dance Guildの共催で、“20世紀の中の伝統的舞踊——アジア・太平洋地域を中心として——”を研究主題と掲げた学会がハワイ大学を会場に開催される。日本からの演者も招かれている。アメリカ現在の舞踊研究・教育の発展を、舞踊家、舞踊研究・教育者、批評評論家の一体の活動、大学教育への位置づけ、文化に対する経済的支度度などの総合成果としてみると、日本の「舞踊学」のこれからにあらためて思いいたさざるを得ない。

舞踊と舞踊学の発展をねがいつつ稿を閉じる。紙数の限界と非才による不備をお許しいただきたい。

## 注

- (1) 明治8年、伊沢修二氏愛知師範学校附属小学校ではじめて唱歌遊戯を課し、その価値を文部省に建議する。(今村嘉雄：日本体育史)
- (2) 従来の呼称をあらため「ダンス」とし、民謡を指導してもよいことを付記した。(学習指導要綱 文部省 昭和22年)
- (3) 東京教育大学体育学部は昭和38年設置。43年省令講座となる。39年修士講座「舞踊学」設置。
- (4) お茶の水女子大学文教育学部に昭和45年設置。同47年修士課程舞踊教育学専攻設置。
- (5) 日本体育学会「体育学研究」大会発表並びに原著(昭25~昭52)
- (6) 体育学研究文献分類目録(谷村辰巳)
- (7) 体育学研究16-4(波多野義郎、西尾貫一他)
- (8) 体育学研究20-3(杉本政繁、水野忠文)
- (9) M. H' Doubler; Dance — a creative Art Experience  
松本訳：「舞踊学原論」
- (10) 舞踊教育の比較研究(松本)女子体育19巻3号

## 舞踊学の動向

### 日本における舞踊研究の足跡

—日本舞踊史を中心に—

板谷 徹

はじめに

いまここで述べようとするのは、日本の近代以降に、主として近世までの日本の舞踊を対象とした舞踊研究の歴史とその方法である。限られた紙数の中で、右に該当するすべての研究業績を、立体的に研究史として構成することは望みうべくもない。一つの私見を示して大方の御叱正を俟ち、舞踊学の現在の足場を確認する議論の一助ともなれば幸いである。なお、小稿は吉川周平「研究の手引—『舞踊』の語と舞踊研究史—」(『日本の古典芸能』第6巻)に負うところ多く、参照されたい。また、文中、敬称はすべて略させていただいた。

舞踊学は文化現象としての舞踊を研究対象とするが、わが国においては独立した舞踊史が存在するわけではない。舞踊と舞踊的なるものの歴史があるのであって、舞踊的なるものを視野に収めなければ、到底日本の舞踊史は成立しない。それ故に、日本では芸能史の存在意義が大きく、研究としての舞踊史が積極的には要請されなかった。この芸能史一演劇史と舞踊史とのかかわりを、郡司正勝は次の言葉で述べている。

……これまで、日本の演劇の歴史と称するものの大部分は、実は舞踊の歴史だといってもあながち語彙ではないとおもう。近代劇が日本の演劇の概念に入りこんでくるまでは、舞踊的要素は芸能の最高の境地と考えられていたのである。(『おどりの美学』)

この特殊な事情の中で、芸能史のなかから舞踊的なるものを抽出すれば舞踊史が成立するかといえば、ことはさほど簡単ではない。例えば能の場合、その最も純粹に舞踊的要素である舞事を採り上げて、舞踊史の中世に位置させるだけでは事足りない。舞事を含む能全体、舞の型を含む演技体系を舞踊の立場から見直すことができなければ、能は舞踊的研究を必要とせず、また舞踊史の中世は埋まらない。

芸能史とは別に舞踊史の立場が有効かどうか、このことは日本の舞踊史研究によって自明のことではなく、まず議論されるべき課題となろう。

## 舞踊学事始

近代の日本における舞踊研究は、明治37年の坪内逍遙による『新楽劇論』にはじまる。厳密に言えば、この書は研究というよりは、新しい国劇樹立のための宣言—「新

曲浦島」の創作ノートと言うべきであるが、のちに舞踊研究の具体的方策を示す「日本舞踊の現在及び将来」(明治41)以下の論文を用意することになる。

明治に移入された西洋の諸学のうち、美学は明治16、17年の『維氏美学』によってはじめてその体系が紹介された。その第二部芸術ノ類別第五篇は「舞踏」にあてられているが、西洋の美学の咀嚼につとめた森鷗外・高山樗牛・島村抱月らの明治の美学からは、その体系の中で舞踊に積極的に取り組む仕事は現われなかった。日本の舞踊に対する理解と評価がなければ、西洋に舞踊の学が存在を知り得ても、日本における舞踊研究ははじまらない。この点で、逍遙が『新楽劇論』においてわが国の国劇を能劇・歌舞伎劇・振事劇に三大別した上で、

我が国の「振事」に関しては未だ嘗て何人も十分の説明をせられたことは無いようであるが、これは実に一種特別の変遷と発達と醇化とを経来ったもので、今日では兎も角も世界に類例のない特質を有している。と評価し、これを刷新して世界に適用する国劇を創るために、振事に説明を与えようとするところに、日本の舞踊研究の出発点があった。逍遙はまず、対象の全体に「舞踊」の語を与えて研究対象を明確にし、前述「日本舞踊の現在及び将来」で、舞踊を構成する諸要素の術語の整理に着手し、また「わが在来の舞踊に就いて」(大正1)では、「踊りの手」について「つひぞまだ手に確定した名称を附してそれを科学的に分類した例をば聞かない」として、踊の各流の手の名称を整理して掲げている。逍遙の開いた舞踊研究の端緒は、「舞踊」の語の定着とともに広がり深まりをもつことになる。この経緯については、郡司正勝「逍遙の『舞踊』という語」(『坪内逍遙研究資料』7)に詳しい。

さて、ここで明治・大正期の舞踊関係のおもな著述を列挙して舞踊研究の黎明期の動向を概観したい。

- 明治 21 小中村清矩『歌舞音楽略史』  
37 坪内逍遙『新楽劇論』  
41 石川戯庵『舞踊論』(『歌舞伎』連載)  
44 柳田国男『踊の今と昔』(『人類学雑誌』連載)
- 大正 2 大日本文明協会編『舞踊と歌劇』  
4 高野辰之『歌舞音楽考説』  
6 大田黒元雄『露西亞舞踊』  
10 永田竜雄『露西亞舞踊』  
11 小寺融吉『近代舞踊史論』  
岩橋小彌太『日本舞踏史』  
永田竜雄『泰西舞踊図説』  
12 坪内逍遙『舞踊論』  
13 ウィント・ワース著 馬場二郎訳『ニジンスキーの舞踊芸術』  
永田竜雄訳『泰西舞踊十二講』  
永田竜雄訳『舞踊理論』  
14 坪内士行『舞踊及歌劇大観』

明治に、振事—歌舞伎舞踊の研究と民俗学の視点(柳

田)を獲得し、また広い視野と確かな見識で、はじめて舞踊論を展開した石川戯庵の著述を得た舞踊研究は、西洋の舞踊を眼前に見る機会に遭遇した大正の人々に、外国の知識を次々と供給し、新舞踊運動の勃興するなかで次第に世界的視野を確かなものにしていった。

#### 小寺融吉の仕事

大正11年には、小寺融吉『近代舞踊史論』、岩橋小彌太『日本舞踏史』と、日本の舞踊史に取組む仕事相次いで出版された。方法において対照的なこの二書をもって舞踊研究は本格的な深まりの時代を迎える。

岩橋の書は、群集舞踏を主題とし、例えば東遊の章では、舞の次第・歌の章句・起源・舞の形式・手振などについて、文献を基礎に記述する。しかし同時に、岩橋は大正14年にはじまる郷土舞踊と民謡の会にも興味を示し、雑誌『民俗芸術』に「現存せる諸方の田楽に就いて」などを寄せているが、田楽をめぐる岩橋・折口(信夫)論争に見られるように、民俗に拠って立つ折口に対して、岩橋は対極的な文献の立場に終始し、岩橋の『日本舞踏史』で試みた舞踊の芸態に即した方法は、『日本舞踊史』(昭和2)、『日本芸能史—中世歌舞の研究—』(昭和26)、『芸能史叢説』(昭和50)と続くのちの著作では、文献中心に深まりをみせてゆくゆえに、芸能史へと重点を移すことになる。

これに対して、小寺がどこまでも舞踊研究の独立を矜持し、舞踊学の全体を構想していくのは、その方法に拠るところが大きい。小寺の方法は、初期の二書—前述の『近代舞踊史論』と『舞踊の美学的研究』(昭和4)とに示されている。

『近代舞踊史論』は、自序に、

舞踊は一切の芸術の中、最も古いもの、最も民衆的なものであった。本質に於ては演劇より層一層人生に有意義であった。また永久に有意義である。然し長い間、世はこれを忘れていた。今や將に記憶から蘇へらせようとしている。

という、舞踊への熱い期待に根ざし、本書の意図を序論に、

我が舞踊の史的変遷を観察して、内に含まれた哲学を捨い出そうとするにある。従って方法は最も科学的でなくてはならない。然るに材料を集めて見ると、所謂歴史的著述の轍を踏み得ないのを悟った。

という。日本の舞踊史を構想するにあたり、地方の郷土舞踊を視野に入れて民俗芸能を現存資料として収集し、のちに「われわれの芸能史は、まず『民俗学』であって『歴史学』ではない」(池田彌三郎『芸能』)とする折口芸能史学に対して、近世・中世・古代の時間意識をもって倒叙体の舞踊の歴史を成立させようとした。その方法は、本書の章立—第二・三章近世の郷土舞踊、第四章近世の芸術的舞踊、第五章中世の芸術的舞踊、第六章宗教と芸術の過渡的舞踊、第七章特殊の放浪的民間芸術家、第八章神社仏閣の宗教的舞踊、第九章獅子舞と田楽、第十

章祈年の舞踊、第十一章古代生活の遺風と舞踊、によっても知られるように、時代の中に生きる「舞踊の社会的意義」を中心に記述をすすめる。またこの書では、民俗芸能を中央一都市の芸能史の補助資料とするのではなく、そこに固有の舞踊的価値を認める姿勢をも忘れてはならない。

一方、『舞踊の美学的研究』は、大正期に次々と来朝した外国の舞踊と、その研究書に視野を広げられた著者が、「舞踊それ自身の本質」「祖国の舞踊の本質」「祖国の舞踊と外国のそれとの本質的差別」を、様式を通して明らかにすることを意図している。第一章原始的舞踊、第二章上古の生活と舞踊、第三章舞踊に対する観念の変化、で様式理解の前提としての舞踊の時代相を述べ、第四章舞踊の様式の根本、第五章体操的動作と身振り、第六章足の動作の二様式、第七章腕の動作の均斉と対照、第八章腕の動作、で様式を構成する動作の分析に及び、これを総合する視点として第九章振付、があり、「振付の法則の科学的研究」が提唱されている。本書で、「舞踊家の芸術と、振付師の芸術とを、常に弁別する」必要を説き、「舞踊の歴史は一面に於て舞踊の振付の歴史である」（「能の型の根本」後述）という立場から、小寺の舞踊美学は、振付を主題としているといえる。この方向は、『をどりの型』2巻（昭和8.9）『をどり名曲解説』（昭和10）で歌舞伎舞踊を中心に進められ、「能の型の根本」（『謡曲界』昭和16.8.11）では能にこれを及ぼした。

小寺はこれら二書をもって、舞踊史と舞踊論（舞踊美学）の両面に視座を据え、日本における舞踊学の可能性を確保したといえる。

## 舞踊研究のその後

昭和に入ってから舞踊研究の諸業績を、簡単に概観しておきたい。

日本における舞踊論は、まず舞と踊の論のかたちをとり、ここから歴史の見通しも出てくる。これを論ずるのは、柳田・折口をはじめ、西角井正慶・三隅治雄・倉林正次など、民俗学からの発言が多く、日本の舞踊の特質を明らかにしている。

小寺融吉の『舞踊の美学的研究』に対置される舞踊論には、郡司正勝の『おどりの美学』（昭和32）がある。この書は、舞踊研究において小寺に兄事した著者が、同じ美学を名乗りながら小寺の美学とは別の立場に立ち、小寺が動作の分析と振付の法則の解明に向ったのに対し、郡司は、

舞踊の生命はポーズやバにあるのではない。その連続に生命感をもたせることにある。生命感とは、リズム感にほかならない。日本ではこれを間という。舞踊は技術をのみみせるものではない。その技術を支えている精神がものをいうのである。

とし、舞踊を思想として捉えることに力点を置く。この立場を一層鮮明にした「舞踊論」（『日本の古典芸能』6）、「『振り』ということ」（『歌舞伎』別冊）などの

論文が前書を補う。

舞踊史では、古代から現代までを十分に展望した通史はほとんどみられないが、歌舞伎舞踊の歴史に、九重左近『江戸近世舞踊史』（昭和4）、小寺融吉『日本近世舞踊史』（昭和6）、石井国之『近世日本舞踊史』（昭和12）、三隅治雄『日本舞踊史の研究—歌舞伎舞踊と民俗舞踊—』（昭和43）などが挙げられる。

このうち、九重は所作事を素材の系統から分類して、成立・各曲の解説・所演年表について述べ、三隅は巻頭に舞踊史概観を置くが、九重と同じ系統的な分類から項目をたてるとともに、「出端と道行」「乱拍子の系譜」「なんばん・六法・丹前」「採り物の系譜」など、新しい観点から歌舞伎舞踊の発想を民俗に探る。いずれも歴史を直接志向したのではない。三隅は、『なんばん芸』の展開（『国学院雑誌』昭和30.11）の副題に「芸能技術論」を纏い、「刹的な肉体行動を一定の形に固定させ、今日に繰返して生寄せしめた民俗」「その民俗の制約から飛躍しようとする芸能の、その行動の『欲望』」を探ることをテーマとして、「舞ひと踊りの成立」（『国学院雑誌』昭和31.9）、「男芸と女芸」（『芸能の科学』6）などの舞踊の民俗学を試みている。

他方、小寺と石井は、江戸時代に時代区分を施して、通常の歴史の体裁をとる舞踊史としている。石井は、作品については九重の系統的な分類の方法を借りながら、代表的な所作事役者・振付師、また所作事の周辺にある踊子・踊師匠・流派にも筆を及ぼすのに比し、小寺は、それぞれの時代区分のなかで、役者・作・作曲・振付・作品にわたって時代相を浮かべようとする。

日本の舞踊全体を扱う通史と、一つの舞台舞踊の歴史とは、当然、時間の観念が異なり、叙述の方法も異なる舞踊史となる。踊る側から、「舞踊は文字に書いたものでも、また音として残っている物でもなく、あくまで一種の〈風〉ともいえる動きと趣きにのみ残る」（『踊りの〈振り〉について』『歌舞伎』別冊4）ことから、踊の出目を時代と役者の〈風〉として把握する八世坂東三津五郎の発言は、また歌舞伎舞踊史を書く側に求められる、一つの歴史叙述の態度であろう。

ここに、流派の研究の中で、列伝体に役者の所作事を述べようとする松本亀松（『舞踊柏木流史』）と、舞・踊・振の動きによる概念定義と現存伝承曲の分析から時代相を明らかにしようとする戸部銀作の仕事が位置づけられようか。

松本にはほかに、『能から歌舞伎へ』（昭和16）、『能の歌舞伎的系譜』（昭和38）など、能と歌舞伎舞踊の双方を見据えながら、振付における比較を試みる仕事がある。

また戸部は、東京国立文化財研究所の共同作業『標準日本舞踊譜』（昭和35）から歌舞伎舞踊の技法分析を一步進め、「踊りの技術—宝暦舞踊を中心に—」（『伝統と現代』6）、「舞・振・踊」（『日本の古典芸能』6）、「舞い・踊り・振り」（『歌舞伎』6）などを経て、舞・踊・振とその組合せによる7つの基本型と、「表現されるもの」

7つの組合せから49の型によって、「日本舞踊の型を網羅」し、「日本舞踊の科学的解明」をなそうとする。

最後に、能における舞踊の研究について触れておく。

能の舞踊を論じた早いものは、小寺融吉の「移り舞の意義」（『謡曲界』昭和12.6）、「シテが舞を舞ふ理由」（『観世』昭和15.5）、「能の型の根本」（既出）など、民俗学の方面からの発言であった。

戦後、表章は、文献資料による「仕舞の歴史的考察」（『観世』昭和33.10）で仕舞の概念を明確にしている。

その後、能楽師でもある味方健は、「『神楽』から『遊楽』—いわゆる『中之舞』の位相について—」（『芸能史研究』19）において、「中之舞」として括られる舞を、「各曲各様の位相」において検討する演出史研究の中で、中之舞の系譜を立て、その本質を解明しようとする。また、松本雍「能における神楽の研究—『巻絹』から『竜田』まで」（『芸能の科学』3）も、舞事の一つである神楽を主題とし、これらの論文は、能の戯曲構成のなかで、舞事を見直す新しい研究であった。

能の研究が、「舞」や動きなど、視覚的な面にはほとんど踏みこんでいない」（座談会「能楽研究の展望」の横道発言。『文学』昭和48.7）現状から、横道萬里雄を中心とする能楽技法研究会は、能の技法を体得した若い研究者を育て、その成果は作品研究に結実し、また同会から「能楽技法要覧」や「技法概説」を生み出そうとしている。

以上、あまりにも筆者の恣意に過ぎる舞踊研究史の展望であった。しかし、舞踊学という立場に立ってこれからの舞踊研究を進めようとする時、おのずから視野に入る先学の業績を辿ったつもりである。公正を基だ欠き、見落しの多いことをお許し願いたい。